

# 生きる力を育む国語科授業への提案

義務教育研修課 指導主事 細島 昌大

## 要旨

国語科教育の中で、言語感覚の正しさ、深さ、豊かさを培う授業展開はどうあるべきなのか。

本研究では、「生きる力」を育む国語科授業をめざし、教材解釈を深めること、明確な授業展開の構想を持つこと、子どもの反応を把握し、指導に生かすことの三つの視点から、その具体的な指導の在り方について考察することとした。特に教材解釈を深めることについては、コンピュータ利用を試みるとともに、現在使用されている小学校6年生教材に即して教材研究の進め方、深め方を明らかにした。

## はじめに

言語感覚の正しさ、深さ、豊かさをめざす国語科授業の実践をとおして、子どもたちが「生きる力」を身につけるにはどのような授業展開が望ましいのか。

本研究を進めるに際し、国語科としてめざすべき授業の在り方を特に3点あげると以下のとおりである。

- ・子どもたちが「おもしろい」と感じる国語科授業であること。
- ・子どもたちに言葉に対する自覚を促す授業であること。
- ・子どもが満足感（成就感）を覚える授業であること。

「おもしろい」とは「心が動く」ことであり、それによって学習意欲がいちだんと喚起されることである。そのためには、子どもたちが教材の核心（真実）に触れ、心が大きく揺さぶられる必要がある。

子どもたちは、言葉に対して無自覚の状態であることが多い。安易に聞いたり、話したり、読んだり、書いたりしている。言葉に対するこのような無自覚の状態から、意識して理解したり表現したりすることができるように導くことが、言語を正確に理解し表現する能力を高めていくことにつながっていく。

こうした実践により、子どもが「分かるようになった」という実感を持ち得るような授業を組織していくことが必要である。授業によって子どもが進歩の状況を自覚し、漠然と感じていたものを明確にすることで、自ら心の中に主体的な学習への種子を蒔き、心の中から学習の喜びを見い出すのである。これらは、生涯学習の基礎としての学ぶ力、学ぶ方法を自分で求めていく学力であり、「生きる力」につながるのである。

## 1. 研究の概要

国語科としてめざすべき授業の在り方を3点あげたが、この考えに基づく国語科授業を実現するために、以下の視点から研究を進めた。

### (1) 教材解釈を深める

教材解釈を深めることを抜きにして、指導の熱意は生まれてこない。何回も読んだり、考えたり、追求したりして教材とかかわることが、教材に対して愛着を抱くことになる。教材を「知る」ことが、教材を「生かす」ことにつながる。

### (2) 明確な授業展開の構想をもつ

授業の構想とは、具体的な授業展開の見通しのことである。教材文のどこに着目してどのような発問をすれば、子どもたちの心を揺さぶることができるかを考える必要がある。子どもたちを揺さぶることのできる発問は、一問一答ではなく、子どもたちの多様な思考を促す問いでなければならない。

確かな授業の構想を教師が持つことができた時、子どもの豊かな考えを導くことができる。

### (3) 子どもの反応を把握し、指導に生かす

子どもたちの国語の力を高める授業のポイントは、子どもの反応を的確に把握し、これを授業に生かすことである。授業中の評価を即座に指導に結びつけていくことによって、教師と子ども、あるいは子ども同士の歯車がかみ合った授業が展開されることになる。

## 2. 研究の内容

### (1) 教材解釈を深めるとは

#### ① 漢字配当表のデータベース化

小学校国語科教科書には、その学年で学習すべき漢

字配当表と既習の漢字表とが掲載されている。また、どの教材文であっても、新出漢字と読み替えの漢字を学習するシステムになっている。その際に把握しておかなければならないことは、子どもたちの基礎学力としての漢字習熟度である。そのためには、下記のような漢字整理表を、漢字すべてについて作成しておくことよい。配当学年・題材名・使用例等・授業で生かされるデータとなる。

漢字	読み	部首	配当学年	題材名	使用例
橋	はし	木	3	つり橋わたれ	つり橋、
	キョウ		6	敬語	歩道橋

3年生で学習済みの「橋」という漢字を6年生で「鉄橋」として取り上げるとき、単に「てっきょう、と読むのですよ。」にとどまらず、「3年生の『つり橋わたれ』っていう物語を思い出してごらん。トッ子ちゃんがとても怖くて渡れなかった物語を習ったでしょう。」と説明すると、子どもの記憶を即座に指導に生かすことができ、漢字への興味・関心を高めることにもつながるのである。

教材文をただ単に読み深めるだけにとどまらず、一つの漢字をとおして、物語のイメージが膨らんでくる。また、教材文により、漢字の用い方の違いや文中での役割にも気づくことになる。このように、系統的にまとめた漢字のデータベース化は、教材解釈を進める上でも有効なものとなる。

## ② キーワードによる文字検索

教材文に出会ったとき、教師が第一に行うことは、教材文を自分の目で読むことである。そして、そこに書かれている内容について自分なりの考えを作りながら、教材研究を進めるのである。

教材文を正確に読む（教材研究）段階において、ここでは、6年生教材「守る、みんなの尾瀬を」（後藤允作 M社出版 教科用教科書 6学年下に掲載）を取り上げ、コンピュータを利用して検証してみた。

本教材文は、小学校6年生の教材文の中でも、18ページにもわたる長文である。そこで、コンピュータの特性を生かした教材分析（研究）ができないか考えた。教材文をコンピュータに入力し、文字検索機能を利用することで文章理解を深めることができる。

コンピュータの文字検索機能を利用する際、どのような目当てのためにどの文字やことばを検索すればよいか、目的をもって文字検索を行う必要がある。ここでは、キーワードの設定と検索目的の確認が大切に

なってくるのである。

## ③ 教材文を用いた文字検索の実際

この教材文は伝記である。まず、「平野長靖」の生い立ち、行動や言葉を手がかりに教材文を解釈していくため、主人公である「長靖」に焦点を当て、文字検索を行った。文字検索の結果、「長靖」は35回も出てきている。そこで、助詞の変化に着目して文字検索を行った。その結果が下記の表である。

名前	長靖は	長靖が	長靖に	長靖を	長靖の	長靖も	長靖
回数 (35)	14	2	1	3	11	1	3

この表を基に、「長靖は」の部分拾い出してみた。

- ・長靖は、自分の身体を傷つけられたような痛みを感じた。
- ・絶望的な自然破壊が進む尾瀬をまのあたりにした長靖は、力なく長蔵小屋にもどった。
- ・長靖は、その夜、ひんやりとしたふとんに入ったが、興奮は収まらず、なかなか寝つくことができない。
- ・長靖は祖父のこんな話を聞くと、いつも、自然が、人間の手によっておびやかされる危機の中にあるのを感じるのだった。
- ・母靖子の実家沼田市で生まれた長靖は、生後百日目の一九三五年十二月一日、母の背に負われて、ふぶきの尾瀬に初めて入った。
- ・妹が、片言で、「トンボ、トンボ。」と言って、つかまえようとする、「さわつちやだめだよ。トンボがおどろいてしまうよ。」と、長靖は妹にやさしく言うのだった。
- ・長靖は、自然を愛するやさしい心と、山できたえた、たくましい心を合わせもって成長していった。
- ・しかし、それでも長靖は、自分自身の結論を導き出していたのである。
- ・長靖は、尾瀬をはなれる道を選んだ。
- ・長靖は、遠く北海道の新聞社で働くことにした。
- ・ついに、一九六三年、長靖は山小屋にもどった。
- ・長靖は、七月に発足したばかりの環境庁の長官に話を聞いてもらうことを決意する一方で、母靖子らと、「尾瀬の自然を破壊から守る会」を作って、友人たちに呼びかけた。
- ・その年の十二月一日、長靖は従業員と二人で、早朝、雪の降る中、東京での「守る会」に出席するために、山小屋を出発した。
- ・午後七時過ぎ、岩清水の近くにたどり着いたとき、長靖は力をついた。

このように抜き出すことでストーリーをほぼ要約した形になる。主人公である長靖の思い、行動を浮き彫りにすることで、この長文のエキストともいべき部分が鮮明に読み取れてくる。

なぜ、作品中の主人公にスポットを当てた文字検索がこのような有効なのか。それは、筆者自身が主人公「長靖」の生き方に心をひかれ、作品をとおして筆者の思いを描いているからである。筆者が作品全体を通して伝えたい「長靖の生き方・考え方、長靖自身の心の変容」を読みとることができ、授業の流れを思いついたり発問が浮かんできたりもしてくる。

この方法は、実際の学習場面でも応用できる。ノートに「長靖は」と書かれた部分の抜き書き作業をした後、子どもたち自身がコンピュータの検索結果と照らし合わせる学習も面白い。

次に、この作品が伝記であることも考え、年代の表記について文字検索を行った。この場合、キーワード

としては「年」のみを検索することで、作品中の年代の流れが理解できる。「翌年」「その年」「三十年余り」というような授業の構想を作り上げるヒントになる結果も得られた。

コンピュータの特性を生かした文字検索により、教材文に対する理解を一層深くし、教材解釈へのヒントまでも得ることができるのである。

#### ④ 文字検索を踏まえた教材解釈の実際

③の作業を踏まえての教材解釈は以下のとおりとなる。

長靖はやさしく逞しい人である。正直で信念の人でもある。だが、筆者が一番心を引かれたのは、いつもぎりぎりのところで厳しい選択をし、決断する苦悩の長靖であった。

ある時、「尾瀬か、人間か」という厳しい選択を迫られたことがあった。長靖が苦悩の末に選んだのは人間であった。「自然がどれだけ美しく、人間がどれだけちっぽけでいやしくとも、私は人間を」、そう言って人間を選んだのである。

この苦悩の結論も、二年後彼は自ら覆してしまう。

「自然か人間かでなく、自然も人間も共に守らなければ」と言って尾瀬に戻るのである。状況は抜き差しならぬところまでできていたのである。

その後、長靖はいつも心に「自然も人間も」と言い聞かせながら、自分の生涯を、文字通り自然のため人間のために費やしていく。まさに損得のない、ただ献身と貢献の一生涯である。

本教材文による授業を展開するに当たっては、何よりも人物の考え方や生き方に焦点を当て、そこから何かを学んでいくような学習をさせたい。長靖は偉大であっても決して神ではない。また、生まれつきの英雄でもない。人々の無理解には、やはり心を痛める弱い人間である。授業では、まずそういうところをしっかりとらえさせ、さらに彼の生き方に目を向けさせていきたい。こうした授業展開を通じ、最後には長靖の人となり自らとを照らし合わせて語る子どもを育てたい。

以上、コンピュータを利用した教材解釈の試みについて述べてきた。教材文をデータとして扱うことは途中でも触れたように、子どもたちの学習の手だてとして有効である。

文字検索以外にも、コンピュータを用い、文字の挿入・削除といった利用が考えられる。高学年になっても主述の関係がはっきり分からない子どもたちに、助

詞や文末を取り去ったプリントを用意したり、漢字にあまり興味を示さない子どもたちに、漢字を全てひらがなに変えたプリントを作成したりすることもできる。このように、教材文をいろいろと加工することにより、子どもが文章に目を向ける手だてとなる資料を作成することができるのである。

(2) 明確な授業展開の構想とは

#### ① 中心語句を基にした指導

一つの作品には、作品の生命を左右するほどの幾つかの重要語句がある。それは、中心語句とかキーワードといったものと同義と考えてよい。それらの中心語句と中心語句とが互いに文章を隔てて響き合い、作品を構成している。文章全体に響き合う言葉を見極め、それらの響き合いを丹念に拾い出した授業展開を考える必要がある。

こうした考えの下に教師自身が教材文を深く読み、教材解釈をし、その解釈を土台として、作品全体から生み出される授業の展開を創りださなくてはならない。

#### ② 「石うすの歌」を例に

ア 中心語句の拾い出し

「石うすの歌」(壺井 栄 作 M社出版 教科用教科書 6学年上に掲載)を取り上げ、その中心語句にはどのようなものがあるか検証してみた。

主人公「千枝子」の行動や思いが作品のエキスであるため、それらが示されている言葉を中心に、千枝子を取り巻く出来事なども、話の展開から拾い出すことにした。結果は次のとおりである。

八月は、いなかのおほんの月です。  
お団子を作ったり、うどんを打ったりするのが、いなかの習わしです。  
八月に入ると、あつちのうちでもゴロゴロ  
こつちのうちでもゴロゴロ  
ひきうすの歌が聞こえます。  
千枝子は、このひきうすの歌が大好きでした。  
大好きになる前は、大きらいだったのです。  
なぜかといえば、  
ひきうすのゴロゴロという音は、いかにもたいくつで、すくねむ  
たくなるからでした。  
いつも  
千枝子は、お手伝いをさせられました。  
初めのうち  
ゴロゴロといせいのよい音を立てていたのが、しだいにゴロン  
ゴロンと聞こえ出し、やがてゴロリンゴロリンと聞こえてきま  
した。  
そんなとき  
千枝子はもうねむくてねむくてしかたがなくなっているが、くたびれて  
いるかどちらかです。  
千枝子をたいくつからせまいとして、おばあさんは、いろいろな昔話な  
どしてくれるのですが、  
——略——  
「そんな話、知ってるわ。」  
生意気を言って  
千枝子は おばあさんを困らせました。  
——略——  
千枝子は、思わず笑い出し  
「団子がほしけりや、うす回せ、

団子がほしけりや、うす回せ。」  
うすに合わせて歌ってみました。  
 千枝子は、わざと言ってみました。  
 「団子ごなんがほしくないから、うす回さん。」  
 しかし、それでは、ちつともうすと団子が合いません。  
 —略—  
 おばあさんは、言うのです。  
 「うすは、そのときそのときの人間の心持ちを、そのまま歌い出すものだよ。」  
 —略—  
 瑞枝もぞかいてくることになったのです。  
 今日は、もう三日です。  
 —略—  
 千枝子は、なんだかはずかしくなつてうつむきました。  
 千枝子は、今日から瑞枝のお姉ちゃんになるのが、とてもはずかしくつたのです。しかし、本当はとてもうれしくて、急に大きくなつたよ  
うな気になりました。  
 —略—  
 八月六日の朝は、瑞枝がうちの人たちと別れて、初めていなかでむかえたこんなに楽しい朝だったのです。  
 —略—  
 どうかするとなきそうになる瑞枝を  
 千枝子たちは、一生けんめいなくさめました。  
 「二人で仲良く勉強しましょうね。」  
 瑞枝はだまってうなずきました。  
 もうあしたは、おぼんの十三日。  
 おばあさんのひきうすはいっこうに動きませんでした。  
 うすの前にすわつたまま、言葉少なく考えこんでいるおばあさんのそばで、うすはだまって泣いているのでしょうか。  
 「おばあさん、わたしがひくわ。」  
 千枝子は、おばあさんをなくさめるようにやさしく言って、うすのそばにすわりました。  
 「そうかい。おばあさんは、もう精も根もつきてのう。力が出んのじゃ。」  
 二人のすかたを見て、おばあさんは、クスンと鼻をすすりました。  
 千枝子は、それを見ぬふりで、ゴロゴロうすを回し続けました。  
 「勉強せえ、勉強せえ、つらいことでもがまんして——。」  
 うすが歌い始めました。  
 千枝子も瑞枝も、額にじっとりあせがでてきました。  
 ( ) は、千枝子を取り巻く出来事を示す  
 ( ) は、千枝子の行動や思いなどを示す

この表のアンダーライン部分がキーセンテンスである。  
 これらは少し広範に過ぎるが、話の展開がよく浮かび上がってくる。

### イ 指導の要点

中心語句を踏まえた指導の要点をまとめると、次のようになる。

(第一節)  
 ・ 楽しく、明るい雰囲気。子どもたちは、異質な世界にひかれ、あこがれるであろう。  
 ・ 田舎の生活や雰囲気をとらえさせる。  
 ・ 千枝子は、大きらいだったひきうすが、なぜ大好きになったのだろうか。(おばあさんとの関係)  
 ・ やさしく、働き者のおばあさん(ユーモアのセンスもある)  
 ・ 石うすが、田舎の生活の象徴であり、千枝子の心の代弁者である。音とともに、この物語の面白さをかもし出し、リズムを作っている。(作者の構成と表現の工夫)  
 (第二節)  
 ・ 戦争による大変な生活の変化はあるものの、明るく、愉快な生活。  
 ・ 戦争のため、生活がどんなに変わっているのか。(疎開や配給の意味と様子)  
 ・ 千枝子の楽しい空想。千枝子と瑞枝のつながり。(瑞枝を待つ千枝子の思い)  
 ・ おばあさんのことば。「千枝ちゃん、妹だと思つて……」が、千枝子の心にどのように響いたか。  
 ・ 千枝子の石うすに対する態度の変化。(だんごがほしけりや、うす回せ……)  
 (第三節)  
 ・ 悲しい結末。しかし、その中に勇気と希望がある。お盆の行事とからめて、お墓参りの場面があり、やがて起こる悲しい出来事の伏線になっている。  
 ・ 事実と仮定の対比から、悲しい事実をより鮮明に浮かびあがらせる。  
 ・ おばあさんのひきうすが一向に動かないのは、どうしてか。  
 ・ 「勉強せえ、勉強せえ、つらいことでもがまんして。」ということばは、だ

れに向けられているのか。また、だれのどんな気持ちなのだろう。  
 ・ 瑞枝と千枝子とおばあさん、それぞれの立場で思いや、他人への思いやりを考える。

中心語句を拾い出す作業を通じ、明確な授業展開の構想を立てることが可能になる。

(3) 子どもの反応を把握し、指導に生かすとは

### ① 予想発問と子どもの反応表の作成

授業は、よく「生きもの」とであると言われる。いくら綿密な指導計画案を作成しても、子どもの思考の流れによっては、実際の授業展開はどうなるかわからない。子どもの思考や判断を大切にすればするほど、計画案どおりに運ばない可能性は高まることになる。しかし、教師はこの授業をとおして子どもたちに何を学ばせ、何を考えさせるのかを明確にしておかなければならない。そのためには、指導目標を立て、一時間一時間の授業展開の構想を持つことが大切となる。教材文に対する子どもたちの思考や判断について予想を立て、事前に発問の流れを明確にしておく。この段階で、子どもたちとの距離や支援の方向性が定まるのである。

以下に具体例として、「石うすの歌」の教材解釈、最終場面での授業目標、展開案、予想される発問と子どもの反応表を示した。

### ア 教材解釈

戦争のまっただ中、そして日本の敗戦。そこには戦争のむごさに打ちひしがれた人間の絶望感、肉親を失った者の哀しみがある。しかしながら人々は、「生きる」ことをとおして人の心の真実をみ、生きる者の真実をみる。

この物語は、当時の日本のどこにでもあった世界の、その小さな世界である。

「ゴロゴロ、ゴロンゴロン、ゴロリンゴロリン」と、そのときの人の心持ちを、そのまま歌い出す石うす。物語には、その石うすを取り囲んで登場人物一人一人の思いが展開される。昔の思い出の中に生きるおばあさん、いとこの瑞枝との再会に楽しい空想をえがく千枝子。そんな千枝子たちの小さな幸せな世界に突然戦争の黒いかげが覆いかぶさるのである。

一人ぼっちになってしまった瑞枝。「精も根もつきてのう。」というおばあさん。そんな哀しみの中から這い上がろうとする千枝子と瑞枝。

石うすがしずかに歌い始める。

「勉強せえ、勉強せえ、つらいことでもがまんして。」

この歌は、おばあさんをなぐさめ、自分たちが生き

ていくことを励ます歌でもある。戦争の悲惨さや哀しみにじっと耐え、耐えることから生きる力を生み出そうとする千枝子たちの心でもある。

子どもたちには、瑞枝と千枝子の手によって力強く歌い出すであろう石うすの歌を想像させたい。

#### イ 本時（最終場面）の目標

瑞枝とおばあさんの姿をとおして、「おばあさん、わたしがひくわ。」と語る千枝子。何が千枝子にこんなことばを言わせたのかを考える。

#### ウ 展開案

主な学習活動の流れ	活動への支援と留意点
(1) 目標を持って読む (本時の目標の確認)	・石うすを踏んでの重苦しい雰囲気の中で、千枝子の心の動きを考えさせるための読みにする。
(2) 「おばあさん、わたしがひくわ。」 千枝子がおばあさんに言ったことばから考える。 ・いっこうに動かそうとしないおばあさん。  ・「精も根もつきてのう力がでんのじゃ」おばあさんのことばの意味を考える。  ・見ぬふりで	・「いっこうに」ということばが文中で持つ意味を考える。このことばが、千枝子の生き方に大きく影響していることに気づかせる。  ・「力」の意味を考える。ただ石うすを回すだけの力であるのか、生きる力までのかを考えさせる。 ・おばあさんの心をつかっているからこそ見ぬふりをする千枝子。これから力強く生きていこうとする千枝子の思いを読みとらせる。 ・哀しいからこそ哀しみに終わらず、これから頑張る生きていこうとする千枝子の気持ちを考えながら読み終わらせたい。
(3) まとめの読み	

#### エ 予想発問と子どもの反応表

T 千枝子が瑞枝に向かっていったことばがあるね。 C 「ふたりで仲良く勉強しましょうね。」ということばです。 T そんなことばを言う千枝子。千枝子は、瑞枝にもつと伝えたいことがあったのだと思うんだけど、なぜそんなことばになってしまったのだろうか？ C 何かするとすぐに泣き出しそうになる瑞枝に対して、一生懸命なくさめことばを捜して、そんなことばしか浮かばなかったと思います。 C 千枝子は、自分も辛いけど、瑞枝の哀しみの方がもつと大きいと思う。千枝子は瑞枝のお姉さんだから、お姉さんが泣いたら瑞枝がもつと哀しくなると思ったから。 T いいこと言ってくれたね。千枝子は、瑞枝に対してそんなふうに乗っているんだらうね。 T 「もう明日は、おぼんの十三日」のところが読んでください。 C (読む) もう明日はおぼんの十三日…… ……額にじっとり汗が出てきました。 T 千枝子は、瑞枝に「二人で仲良く勉強しましょうね。」って言った。そして千枝子は、おばあさんに言っていることばがあるね。何て言っている？ C 千枝子は、おばあさんに「おばあさん、わたしがひくわ。」って言っています。 T 千枝子が瑞枝に向かって言ったことばについて今話してもらったのだけれども、「おばあさん、わたしがひくわ。」となぜ千枝子は、言ったのだろうか？ C 「おばあさんのひきうすは、いっこうに動きませんでした」というところから、おばあさんのひきうすが動かなかったの、「千枝子はわたしがひくわ」と言ったんだと思います。 T うすをいっこうに動かさないおばあさん。何かを考えているおばあさん。そのおばあさんの気持ちが分かって千枝子は、「わたしがひくわ」と言ったんだらうね。「いっこうに」ってどんなこと？ C せんぜん。全く。 略 T 今、おばあさんのうすは動いているの？動いていないの？ C 動いていない。 T うすはいっこうに動かない。おばあさんにうすをひこうという気持ちはあるのだろうか。ないのだろうか。 C ひく気持ちはあるけど、哀しすぎてひく気持ちはなれないと思います。 C うすは、そのときそのときの人間の気持ちを歌い出すものだから、おばあさんの心も泣いているんだと思う。 T では、「いっこうに」ということを、全くと言ひ換えていいの？ 略 T そうすると、そんな哀しいことがあったということ。そしておばあさんは、「もう精も根もつきてしまった」と言っている。そして、「力がでんのじゃ。」と言っている。このおばあさんの言う力とは、石うすを回す力なのだろうか？
---

C ひく気持ちはあるけど、哀しすぎてひく気持ちはなれないと思います。 C うすは、そのときそのときの人間の気持ちを歌い出すものだから、おばあさんの心も泣いているんだと思う。 T では、「いっこうに」ということを、全くと言ひ換えていいの？ 略 T そうすると、そんな哀しいことがあったということ。そしておばあさんは、「もう精も根もつきてしまった」と言っている。そして、「力がでんのじゃ。」と言っている。このおばあさんの言う力とは、石うすを回す力なのだろうか？ 略 C 生きる力さえも失ったと言っているおばあさんの姿を見て、この哀しみを乗り越えようとする思いが出てきんだと思う。 T そんな千枝子の決意を「おばあさん、わたしがひくわ。」って言ってからの千枝子の行動から読みとれるところない？ 略 T 今、二人の心にどんな石うすの歌が聞こえているのでしょうか。 C 「勉強せえ、勉強せえ。」「つらいけど、がまんして、勉強せえ。」 T そんなふうには聞こえたのかもしれないね。もう一度読んで終わりましたら。 (Tは、教師。Cは、子ども)
--

以上は、授業前に予想した展開例であり、実際はこのような展開されるとは限らない。しかし、一時間の授業に臨むに対して、このような作業が必要なのである。

実際の学習活動では、子どもたち自身が教材文に働きかけ、子どもたち自身で文章に立ち向かい、子どもたち自身で文章を読みこなす。学習はすべて、自主的・自発的でなければならない。

教師がリードする場合であっても、なるほどと思えるような手段や手順を学ぶことによって、子どもたちは作品を読み深めることができるのである。今度はここで学んだ方法を使って読んでみようという示唆と内容を持った指導でなければならない。

こうした発問の流れと子どもの反応表を作成することにより、授業における子どもの実際の反応を生かすことが可能となる。また、どこで新しい視点を示し、子どもの考えを発展させるのかのポイントも明確となる。

#### ② 子どもによる課題作り

子どもたちが、自ら作った課題を中心に授業を構築し、作品を読み深めていく。作問させることは、子どもたち自らが主体的に教材文に立ち向かっていく態度を培うことにつながる。

どんな小さな課題でもよい、自分がまず疑問を持つことこそ大切であり、そこから授業が始まる。この課題作りは、子ども一人一人が主体的な学習を展開する上で、思考力や判断力、表現力を培い、子どものよさや可能性を生かす評価活動にもつながることになる。

子どもたちは、初めは教師から普段質問されているようなものを多く作る。しかし、自分が知りたいことを追求していくための課題を作るためには、本文をしっかり読まざるを得ないことに自然と気がついてくる。

さらに、課題解決のために、何度も本文を読み返ししながら自分の考えをより確かなものにしていくのである。

ここで授業者にとって大切なことは、子どもたちが作った課題を、子どもたちの力で解決できる課題と教師の援助が欠かせない課題とに整理することである。

このような作業を通じ、グループや学級全体で取り組むべき課題が明確になってくる。

ア 教材文「守る、みんなの尾瀬を」に即して

(ア) 子どもたちが作った課題

「守る、みんなの尾瀬を」を教材文として、次のような課題が子どもたちから出された。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・長瀬が、自分の身体を傷つけられるような痛みを感じるというのは、何を見たからか。</li> <li>・泉がかれるとき、自然が死に向かうとは、どういうことか。</li> <li>・泉がかれるとは、どういう意味なのか。</li> <li>・絶望的とは、どういう意味があるのか。</li> <li>・それなのに_____。ダツシュのあとにつくことはなにか。</li> <li>・くいの残らないとは、どういうことか。</li> <li>・尾瀬が高山植物の宝庫とはどういうことか。</li> <li>・長瀬は、なぜ尾瀬にもどったのか。</li> <li>・尾瀬にひかれるとはどういう意味なのか。</li> <li>・ものごとをあらためないとは、どういう意味なのか。</li> </ul> <p>(略)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・長瀬は、自分自身の結論を導き出すというのは、どういう結論なのか。</li> <li>・長瀬にとって、自然も人間も共に守るとは、どういうことなのか。</li> <li>・環境庁長官は、たれでも会ってくれるのだろうか。</li> <li>・筆者が読み手に一番言いたかったことは何か。</li> </ul>
---

子どもたちから出された課題を中心に、教師の援助が欠かせない課題を整理し、授業展開案を作成する必要がある。以下に、本教材文の5場面の授業目標と展開案を記載する。

(イ) 本時の目標

「尾瀬の自然を守る会」が発足するまでの苦労を読みとる中で、「自然も人間も共に守る。」と言った長瀬の考えを理解する。

(ウ) 展開案

主な学習活動の流れ	活動への支援と留意点
(1)自分自身の結論を導き出し尾瀬を離れて暮らしていた長瀬とあるが、自分自身の結論とは何か。長瀬は、自然よりも人間が大切ということか。だが後に尾瀬に戻った長瀬は、あいまいな考えの人か。戻ることに、長瀬は苦悩したのか。決断は早かったのか。	・常に危機にさらされてきた尾瀬の自然について一時も忘れてきたことのない長瀬の心をつかませておきたい。 ・離れるに際しても、離れていても、実は心の中から尾瀬が消え去ったことはない。 ・生まれ育った尾瀬の自然について、長瀬の感じ方を読み取らせたい。
(2)工事のため、泉もかかれてしまった。枯れた泉の前に立つ長瀬の心は、おたややかか。長瀬の運動は支援されたのか。長瀬の行動を支えたものは何か。	・泉がかれてからの長瀬の行動を手がかりに「尾瀬の自然を守る会」の発足までの苦労を読み取る仕事である。 ・何度も足を運んだであろうことをしっかりとつかませたい。
(3)長瀬の根底にある思い・考え方は何か。こんどは尾瀬だけが大切なのか。「自然も人間も共に守る。」この言葉にかくされているものは何か。	・尾瀬の深い雪が春のおとすれとともに溶け出すように、この叙述を手がかりに、長瀬の苦悩の深さに迫る。
(4)「自然も人間も共に守る。」ことが長瀬のただ一つの考えである。その考えのもとで、環境庁長官の前で話す長瀬。悪者よばわりする人へ、必死で説得する長瀬。その長瀬になって話してみる。	・トンボの話などが出てくると考える。 ・児童を長瀬の立場に立たせることで、より深く理解できる。どうすることで、一生を尾瀬の自然保護のために尽くした長瀬の気持ちや考え方が、より理解できる。

イ 課題作りで得られる力

子どもたちは、自らが作った課題を中心に授業が展

開するため、授業への関心や意欲が自然と高まっていく。この課題作りをとおした手法は、子ども一人一人が主体的な学習を展開する手だてとして有効である。

また、子どもの理解度や反応を把握し、指導に生かす上でも有効である。

### 3. 研究のまとめ

「教える」指導は、知識を注入するには効果的かもしれない。

しかし、国語科の授業をとおして「生きる力」を育むためには、言語としての語彙を豊かにすること、一つ一つの語彙の意味を深く理解すること、そして身に付けた語彙を的確に使用できることが大切である。そのためには、作品を通じ作者特有の語彙の用い方や表現方法を深く理解することも大切である。

また、教室や日常生活の中で、友だちの発言に耳を傾け、そこから新たな考えを持つことなど、言語感覚を豊かにしていくことが、生きる力につながるのである。

今後、各学校とも連携しながら、子どもたちのよさや可能性を一層引き出し、指導に生かすための方法について、より実践的な研究を進めていきたい。

おわりに

以上、子どもたちに「生きる力」を育むための国語科授業の在り方について論じてきた。本研究が、今後の国語科授業を進める上での一助になれば幸いである。

### 参考文献

- 1) 垣内松三著「国語の力」明治図書(1983)
- 2) 青木幹勇著「問題をもちながら読む」明治図書(1983)
- 3) 文部省「小学校指導書国語編」ぎょうせい(1988)
- 4) 文部省「小学校学習指導要領」大蔵省印刷局(1988)
- 5) 森久保安美著「話しことば教育のプログラム(1)(2)(3)」明治図書(1989)
- 6) 柴屋晴夫・植松雅美共著「教師の技 話す」東洋館出版(1994)
- 7) 植松雅美著「教師の技 書く」東洋館出版(1995)
- 8) 文部省「小学校国語指導資料 新しい学力観に立つ国語科の授業の工夫」東洋館出版(1996)
- 9) 日本教育新聞社関西支社人間教育研究協議会編「21世紀の教育のあり方を考える 生きる力を育てる教育を求めて教育セミナー関西'97収録集」日本教育新聞社(1997)